

2008年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量											
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出 生(ダ)	在庫	加工		
					生	冷	開			塩干	塩蔵	缶詰
19	297	257.9	0.31	32.9	15.4	0.6	3.2	2,380	39.3	20.8	13	10.1
20	355	307.2	0.12	57.1	17.3	0.8	3.2	2,360	45.2			
%	120	119	39	173	112	142	99	99	115	0		0

年	産地	価 格					全サンマ		
		東京			輸入	輸出	水揚	価格	消費支出 生(円)
		生	冷	開					
19	73	319	222	365	244	90	295.8	74	1,504
20	66	326	231	372	238	81	343.2	67	1,483
%	90	102	104	102	98	90	116	91	99

漁業・漁獲の動向と資源

太平洋近海から沖合にかけては日本、ロシア、台湾、韓国が棒受網により漁獲しているが台湾とロシアでは、近年、漁獲量が増大している。そのうち日本のシェアは、2005～2007年の平均で56%であった。日本の漁獲量は1950年代から多くなり、1960年代後半から1970年代にかけて不振で、1980～1990年にかけて回復し、1991～1997年は高水準であった。1998、1999年は不振となったが、その後回復し、近年は高水準となっている。

2008年漁期前調査によれば、西経165度～日本の沿岸に分布しているサンマの資源量は、4,832千トンで、豊漁であった2007年と同程度であった。2008年級の加入尾数は、約321億尾で2002年以降では最も少なかった。CPUEは、1980～1990年にかけて上昇し、1991～1997年は高水準であった。1998、1999年は低水準となったがその後回復し、近年は歴史的にみて高水準となっていることから、資源水準は高位、資源量は2004～2008年にかけて400万トン強で安定していることから、資源動向は横ばいと考えられている。

20年の漁獲量は前年を5万トン以上上回り平成2年以来の約35.5万トンであった。

本年も操業に当たって、各種休漁措置は前年同様実施され、積荷制限も含め漁獲の平準化のための措置が講じられた。

本年は前年同様早く7月8日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日（ロシア水域に入域しない漁船が23日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして棒受網の20トン未満小型船が8月5日、同40トン未満中型船が8月8日、同40トン以上大型船が8月19日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は一部ロシア水域に入ったものの昨年とほぼ同様な漁であった。しかし8月に入ってからはやや停滞気味の時もあったがその後好漁になり早々と積荷制限や休漁措置が講じられたが、水揚げは昨年並みであった。また盛漁期の9月に入ってから基本的には好漁基調で推移し、それ以降の10、11月、そして久しぶりに操業がまとまった12月を含め昨年を上回って推移した。

本年の初期漁場は流し網が昨年より沿岸よりの道東近海で始まり、昨年同様10トン未満船が釧路南東沖合で始まり、8月に入ってから大型船は一部ロシア水域での漁場形成がみられたものの道東沿岸～色丹島南東沖に漁場が形成された。

9月に入ってから襟裳岬南から南東海域にも広がった。10月に入ってから、三陸北部にも、そして三陸沖一帯に、そして中旬には常磐海域にも南下漁場が形成されたが、主体は三陸沖であった。そして道東沖漁場は、11月中旬まで長期に亘って継続した。11月下旬以降は三陸沖と常磐沖で、12月中旬には、常磐沖漁場がなくなり、宮古沖での漁場を最後に漁は終了となった。本年はオホーツクでの漁獲はなかった。(前年71隻268トン)

魚体長は、漁期全般を通じて大型(29cm)主体の組成で体重は140gにピークがあり続いて130g、160gで、通算では大型89%(62%)、中・小型11%(38%)であった。

魚価は、初漁期の7、8月に昨年を上回り、そして9月にほぼ前年並みまで下げ、その後は前年を下回って推移した。特に9月以降は本年も2桁台の価格に急落した。特に久し振りに操業となった12月は、この月としてはまとまった水揚げとなったことや、ミール市況や餌料の下落、輸出の停滞等の状況も重なって、急落した。その結果浜値は大型組成に偏重したこともあって67円で前年(73円)をやや下回って推移した。

在 庫 量

本年は6.3万トンと近年では比較的多い越年在庫から始まった。こうした高い在庫水準は上半期一杯続いたが、好調な輸出もあって新漁期でもある例年在庫が最も少なくなる7、8月には前年を下回る2万トンにまで減少した。しかしその後は、漁が順調だったことや、期間一杯の操業も加わり10月以降急増し、その結果越年在庫も8.9万トンと前年(6.3万トン)を大幅に上回った。

平均在庫量は、上半期前半と下半期後半の在庫の多さを反映しし、4.5万トンで前年(3.9万トン)を上回り、平成18年に次いで多い年となった。

消費地入荷量と価格

20年の東京中央卸売市場の入荷量は、生1.7万トン、冷0.8千トンで前年(生1.4万トン、冷0.3千トン)並みであった。

本年は、操業期間の長期化とTAC枠の拡大もあって、鮮魚の入荷が昨年をかなり上回ったのが特徴。

本年の東京消費地における入荷サイズは特大サイズ35、40尾が少なく45尾、50尾サイズ主体の入荷であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.3万トンで引続き前年(0.3万トン)並みであったが、若干減少気味である。

本年は東京消費地価格のピークは9月にみられたが、前年以上にその後の入荷も多く、各月とも前年を上回って推移した。

平均価格は生326円(前年319円)、冷231円(前年222円)、塩372円(前年365円)で、生鮮、冷凍、塩干とも若干の上昇となった。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量、金額とも前年を1%下回ったがほぼ横ばい水準であった。

輸 出 入

本年の輸入は、123トンで前年(313トン)を下回った。

これは本年も資源の豊富さを背景に国内生産が順調であったことが要因である。

輸出はH 4 年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じ本年も5.7万トンと前年（3.3万トン）に続いて大幅に増加し、平成4，5年の高水準の時代に戻っている。

価格は、輸入238円(前年244円)、輸出81円(前年90円)であった。

輸出国は、本年はタイが最も多くなり、36%を占める20,802トンで、続いて中国、韓国、ロシア、ベトナム、フィリピンであった。